

ArCS III 若手人材海外派遣プログラム

派遣支援 終了報告書

氏名： 吉田早希

対象となる取組みの名称

アラスカ先住民コミュニティにおける、参加型アプローチを用いた地域介入プログラムの開発に関するインタビュー調査

■ 派遣中の活動と成果

【概要】

2025 年 8 月 24 日～2025 年 9 月 8 日にかけて、アメリカ合衆国アラスカ州のフェアバンクス・アンカレッジ・ノームの 3 都市を訪問し、地域介入プログラムへのコミュニティ参加がどのように行われているのか、インタビュー調査を実施しました。

【研究背景・方法】

近年、健康格差は国内外で重要な課題として注目されており、経済状況や住環境などの健康の社会的決定要因 (Social determinants of health) の影響を受けて生じるとされています。

米国アラスカ州では、非先住民と比較した先住民の年齢調整死亡率が約 3.5 倍に達するなど、顕著な格差が報告されており、植民地支配の歴史による文化・土地の喪失、歴史的トラウマ、過去の研究利用への不信など、先住民特有の要因が複合的に影響しています。

こうした課題に対応するためには、コミュニティの主体的参加を通じて歴史や文化に根ざしたニーズや伝統的価値観・知識を反映させ、社会的決定要因に沿った対策を講じることが不可欠です。とくに、先住民社会に根付くホリスティックな価値観への理解は先住民の健康の理解と介入に重要です。

そこで、本研究では、先住民の狩猟採集に基づく生活様式を踏まえ、人・動物・環境の相互作用に注目するワンヘルスアプローチの概念も参照し、自然科学者、人類学者を含む幅広いプログラム実施者から聞き取りを行いました。

アラスカ州においては、科学者やプログラム実践者が参加型のアプローチを取り入れて積極的に取り組みを進めてきました。しかし、これらの取り組みの具体的な内容について体系的に整理した研究はありません。

そこで本研究では、アラスカ州先住民コミュニティにおける参加型プログラムの実践者を対象としたインタビュー調査に加え、関連する既存資料および観察データを統合し、参加型アプローチの枠組みを抽出・分析することを目的としたケーススタディを実施しました。



(キャプション：インタビュー中の様子)

【調査成果】

4名への予備調査ののち、計12名（うち渡航中9名）のプログラム実践者への聞き取り調査を行いました。加えて、今後の研究協力に向けた依頼やネットワーキングも行いました。現在も、現地で築いたつながりを活かし、オンラインで追加調査を継続しています。

インタビューの結果、地域の文化や価値観、ニーズを尊重する実践者の誠実な姿勢が、地域との信頼構築に繋がり、プログラムや研究の受容性・持続性を高める、重要な要素であることが明らかになりました。また、地域の知恵は、アラスカ州では特に数千年にわたり培われてきた実践知であり、研究者がその学びを尊重し、科学的知見と結びつけながら活用することが求められていました。遠隔地での活動には経済的・時間的制約といった課題が伴うものの、地域のキーパーソンや訪問のタイミングを見極め、住民と語り合い、時には食事を共にしながら創り上げていくことが、コミュニティに自立性と持続的な発展をもたらすことなどが示されました。

また、インタビューに加えて、フェアバンクスおよびアンカレッジでは、主に大学や医療機関を訪問し、具体的な取り組みや地域保健・地域参加・先住民文化に関連する情報収集を行いました。ノームではさらに、ヒアリングにご協力いただいた先住民の方のフィッシュキャンプを訪れました。フィッシュキャンプには、漁の後に保存食を作るための作業場が備えてあります。

遠くに連なる山々と、果てしなく広がる豊かな大地、絶え間なく寄せる波、季節に合わせてダイナミックに移り変わる太陽を眺め、先住民の人々が自然を尊び、その恵みと調和して生きてきた歴史や価値観を実感しました。一方、ゴールドラッシュ時代の面影を今も残すノームは、一軒のスーパーと小さな空港を有する静かな町でしたが、アラスカ州では中規模都市に分類されます。インタビューからは、さらに遠隔に位置する地域に暮らす先住民の村々が、へき地や格差の深刻化という現実の最前線であるということを学びました。

人の生涯を通じて深く関わる保健分野においては特に、自然観や歴史的背景を踏まえ、地域の人々の生活や価値観に根ざした取り組みを推進することが、国内外を問わず今後ますます求められると感じました。

【今後の展望】

今後、収集した各種データの分析を進め、国内外の研究者・プログラム実践者が参照できる、参加型共創フレームワークを提示したいと考えています。そして北極のサイエンスコミュニティに向けて、国際的・学際的に参加型共創の意義とその具体的な方法として発信していくことを目指します。

昨年度、アラスカ先住民の自殺予防について、国際学会発表の機会をいただいたことで、アラスカ州における実地研究を行う上での繋がりを築くことができ、本研究に取り組む決心がつきました。今回の若手人材海外派遣プログラムのご支援なしでは叶わなかったことであり、成果を実際に形作っていくというかけがえのない経験と、とても貴重な知見を得ることができました。ご支援を賜りましたプログラム関係者の皆様、アラスカ大学の皆様、北極研究に携わる全ての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

	性別	年齢	専門分野	プログラム/研究のトピック
1	男	40代	人類学	先住民の伝統的知識と言語
2	女	50代	人類学	先住民の伝統的知識
3	男	50代	人類学	先住民のフィッシュキャンプ
4	男	30代	環境政策	気候変動と実用科学のサイエンスコミュニケーション
5	女	40代	生態学	気候変動によるコミュニティの安全への影響のモニタリング
6	女	70以上	生物学	環境の観測・測定の教育
7	女	30代	心理学	先住民学生の自殺予防
8	女	40代	公衆衛生学	伝統的な身体活動と健康の関連調査
9	女	60代	海洋生物学	有害藻類ブルームへの対応
10	女	40代	先住民保健	先住民の若者の自殺予防
11	女	40代	環境疫学	山火事の煙への対応
12	女	30代	生物人類学	伝統食と食料安全保障

（キャプション：インタビュー参加者概要）



（キャプション：ノームのツンドラ）